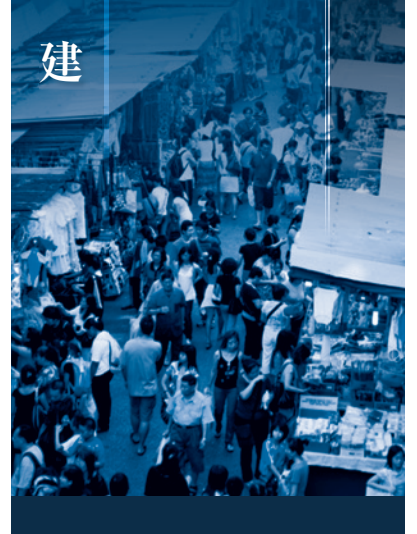


## 映画にみるインドネシアの中間層文化、宗教と政治 (特集 イメージと実態の中間層)

著者	見市 建
権利	Copyrights 日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	204
ページ	20-21
発行年	2012-09
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://doi.org/10.20561/00045804">http://doi.org/10.20561/00045804</a>

# 映画にみるインドネシアの 中間層文化、宗教と政治

見市 建



二〇一一年初頭に始まったいわゆる「アラブの春」は一三年前のインドネシアにおける政変を思い起こさせた。一九九八年の政変の大きな原動力となったのも学生を中心とした都市部の若者による政権打倒のデモンストレーションであった。インドネシアはその後、三度の総選挙を無事に行い、近年は経済も好調、内需が拡大し中間層は人口の半数を超えたともいわれる。次々と建設されるショッピングモールには欧米のブランドや日本食のレストランなどが並び、その風景は他の国のそれと区別がつかない。幅広い中間層のなかには相当な格差があるが、グローバルな消費主義は浸透し、住み込みの家事労働者でも携帯電話を持つようになり、「フェイスブック」の利用者数は世界第二位ともいわれる。もっとも、いわゆるグローバル化は均一化ばかりに向かうのではなく、インドネシアでは固有の

コンテンツ市場の展開が華々しい。一度はハリウッド映画やテレビの多チャンネル化に押されて「死んだ」ともいわれていた国内映画産業は活況である。九〇年代に大きく落ち込み、九八年には一桁になった製作本数は、二〇一〇年代になって一〇〇本近くに回復、時代を彩る大ヒット作も生まれている。

本稿はこの一〇年余りの間に大ヒットした三本の映画を主たる題材に、中間層と消費、宗教と政治の関係について考察してみたい。より具体的には、上記のショッピングモールに象徴される中間層の消費主義がいかにイスラーム化と関係し、ジャカルタを中心とした政治的な表象と結びついているのかを明らかにする。

## ● 中間層のアイコン

新時代の幕開けを象徴する青春映画『チンタに何があったのか』

(二〇〇二年) はジャカルタの中間層の女子高生を活写し、『ビューティフル・デイズ』という邦題で日本でも公開された。「愛」を意味する主人公チンタは影のあるランガに惹かれる。ランガが一九四〇年代に活躍したハイリル・アンの詩を愛読し、また父親がスハルト時代に共産主義者の疑いをかけられた知識人という設定が、作品にインドネシアらしい深みを与えている。しかし、むしろ作品全体を覆うのは、ジャカルタの若者言葉、ポップバンドのライブ、カフェ、自家用車など、ジャカルタ首都圏の中間層のアイコンである。アメリカに留学するランガとチンタのキスシーンも話題になった。主人公の友人にはムスリムのベールをかぶったものは一人もおらず、彼等の宗教やエスニシティも明らかではない。

こうした宗教やエスニシティを問わない都市の、とりわけ若年層の女性を中心とする消費主義的な中間層文化は九八年以降のインドネシアを規定するひとつの特徴だといえるだろう。開放的な雰囲気は、例えば近年「韓流」の女性アイドルグループや日本のAKB48のジャカルタ版JKT48が容易に受け入れられる背景となっている。

## ● イスラームとファッショ

『ビューティフル・デイズ』の世界と一見相反するようだが、イスラームを強調する映画やテレビドラマも増えている。その代表作がエジプトを舞台にした『愛の章句』(二〇〇八年)である。原作のベストセラー小説は「宣教」を目的とすると謳われており、映画でも主人公がイスラームの規範について語り、エジプトという舞台、ファッションや音楽は「イスラーム的」である。イスラーム的規範を強調したポップカルチャーはスハルト体制期から存在するが、二〇〇〇年頃からより洗練されたコンテンツがメディアを席巻するようになった。日本のマンガを模したイラスト入りのイスラーム的恋愛小説、「イケメン」のテレビ説教師、人気ロックバンドが歌うイスラーム歌謡などである。

こうした傾向は先の開放的な雰囲気と共存している。『愛の章句』はイスラーム的味付けをした恋愛

物語に過ぎないとみなすこともできる。カイロのアズハル大学でイスラームを学ぶインドネシア人留学生が、女性にモテるがゆえに困難に巻き込まれるという内容であり、トルコ系ドイツ人と結婚し、彼に想いを寄せるコプト・キリスト教徒のエジプト人も改宗して第二夫人となる。彼はアラビア語の他に英語も使いこなし、アメリカ人女性ジャーナリストにもイスラームの教義を説く。他方で、アズハル大学の教師たちを例外として、エジプト人男性の多くは暴力的で偏狭、父権主義的に描かれる。国内のムスリム観衆にしか通じない、中東への一種の「オリエンタリズム」の表明ともいえるだろう。

ユドヨノ大統領はこの映画をみて「三度泣いた」といい、各国の大使を呼んで上映会まで行った。また実際に本作はシンガポールやマレーシアでも上映された。東南アジアのムスリムが経済発展などを背景に、「イスラームの本場」中東に対峙しようという自信を深めているとみなすこともできるだろう。『愛の章句』が説く宗教教義はインドネシア社会一般のなかでは「保守的」な部類であり、例えば主人公は女性との握手を拒む。しかし本作によってイスラーム的ファッションがブームになり、またスポンサーが提供する清涼飲料

がたびたび劇中に登場することが象徴しているように、イスラーム化は都市中間層の消費主義と手を携えて進行しているのである。

### ●「インドネシアン・ドリーム」

『愛の章句』と同じ年に、これを上回る四〇〇万人以上の観客動員記録を更新したのがやはり同名のベストセラー小説を映画化した『虹の兵士たち』（二〇〇八年）である。同作は一九七〇年代のブリトン島で廃校の危機に瀕した小学校を舞台とし、奮闘する女性の新人教師とともに貧しい家庭の子供たちが生き生きと描かれている。ラストシーンでは主人公は夢が叶ってパリに留学するという成功譚である。同作はミュージカルにもなり、続編『夢追いかけて』（二〇〇九年）も成功を収めた。

『虹の兵士たち』は一般に「イスラーム映画」とはみなされていないが、舞台となったのは二〇世紀初頭からイスラーム教育と世俗教育を統合させた学校や病院を数多く設立してきたムハマディアの小学校であり、劇中でも地域唯一の歴史あるイスラーム学校であることが何度も強調されている。映画の配給元も一九八〇年代以降のイスラーム出版の中心となったミザン社であった。ミザン創設者のハイダル・バギルは著者とのイン

タビューで、本作は『愛の章句』が体現するしばしば表面的な宗教実践よりも貧困のような社会問題のほうが重要であるというメッセージを含んでいるとし、また「イスラーム主義でもリベラル派でもない中道を目指すと述べている。他方、かつてイスラーム政治勢力が反発した国民統合教育もポジティブなものとして描かれている。

その後、「イスラーム的」な映画やテレビドラマが多数作られている。その内容は実に多様であるが、宗教的シンボルを強調する登場人物の自分勝手な（非宗教的）行いをコミカルに描く人気テレビドラマ『身分証明書上のイスラーム』のように、「説教臭さ」を避けてつつ、より多くの人々の倫理観や宗教観に訴える作品が増えているように思われる。

### ●中間層文化と宗教・政治

インドネシアにおいては消費主義の浸透とイスラーム化が同時並行している。政治においても、かつてあったようなナシヨナリストとイスラーム系政党のイデオロギー的対立は影を潜めている。そしてメディアで形成される候補者や政党のイメージが極めて重要になり、専門の選挙参謀や世論調査が重用されるようになった。

二〇一二年七月のジャカルタ州

知事選挙でトップに立ったのは、地方都市の市長から登りつめたジョコ・ウィドドの「インドネシアン・ドリーム」であった。通称「ジョコウイ」の「庶民的」なイメージが大衆的な支持を引き出したが、ビジネスマン的なセンスで行政に効率化をもたらした実績のアピールも中間層には重要であったであろう。現職候補は既存のイスラーム団体からの支持や地元のプロタウイ人であることを強調したが及ばなかった。他方、宗教的イメージが薄いジョコウイと華人キリスト教徒である副知事候補へのネガティブキャンペーンが行われ、決選投票を前にジョコウイはメッカ巡礼へ赴いた。九月二〇日の決選投票は、二〇一四年の大統領選も睨んだ今後の各党の戦略に少なからぬ影響を与えるだろう。九月二〇日の決選投票はひとつの試金石になるだろう。

（みいち けん／岩手県立大学総合政策学部准教授）

#### 《参考文献》

- ・日本インドネシアNGOネットワーク（JANNI）『インドネシア ニュースレター』七六号（特集 インドネシア映画を語る）、二〇一一年八月。
- ・Ariel Heryanto, "Upgraded piety and pleasure: Andrew N. Weintraub (ed.), Islam and Popular Culture in Indonesia and Malaysia, London and New York: Routledge, 2011, pp.60-82.